古代の言説とヨーロッパ・アイデンティティ
―古代ギリシアにおける「他者」の言説―

庄子　大亮

はじめに

古代ギリシアが、芸術や哲学、民主政治など、様々な面でヨーロッパの源流として位置づけられてきたことは周知の通りである。そもそも、「ヨーロッパ」という名称自体が古代ギリシアに由来している。ギリシア人はヨーロッパという名によって、自分たちの住む地とその北方を漠然と指し示したに過ぎなかったのだが、重要なのはそれが東方の「アジア」に対置して用いられた名であったことだ。ここに示唆されるように、ヨーロッパとオリエントという二項対立も、古代ギリシアに遡る。すなわち、古代ギリシアでは異民族を「バルバロイ」と呼んで蔑視する考え方が存在したが、ギリシア人―バルバロイという二項対立は、ヨーロッパ―オリエントという対置に重なり合うのである。またそれゆえに、オリエントを他者として対置する古代ギリシア史像は、ヨーロッパ中心主義批判の一つの争点となっている。

例えば、アメリカの政治学者 M.バーナルは「古代ギリシア文明の起源はオリエントに遡る」「ギリシアはエジプトの植民地である」と主張して、論争を惹き起こした[1)]。多方面に波及したこの論争について、今ここで詳細に検討することはできないが、古代史研究者ではないバーナルが古代ギリシアという場を選んでヨーロッパ中心主義批判を展開し、その後論争が続いていることは、古代ギリシアとヨーロッパとのつながりの強さをあらためて示している。また、古代ギリシアとオリエントとの関係をどのように捉えるかが、今なお重い含みをもつ問題であることを示してもいる。

本報告では、こうした背景をふまえつつ、オリエントを他者として対置するギリシアの言説に焦点をあて、古代ギリシアとヨーロッパ・アイ

デンティティとの関わりについて考察したい。それは、ヨーロッパの源流としての古代ギリシア像が形成された近代も視野に入れている。古代と近代の言説の相互作用という観点から、「歴史としての」ヨーロッパ・アイデンティティの一面を、動的に捉えたいと考えるからである。そのためにまずは、アルカイック期（前 8 ～前 6 世紀）におけるオリエントとギリシアの関わりから考察を始め、次に古典期（前 5 ～前 4 世紀）におけるバルバロイ観について検討する。そのうえで、近代のギリシア史像形成と、古代の言説の影響に目を向けたい。

１．アルカイック期ギリシアとオリエント

１）オリエントとの接触

アルカイック期には、「バルバロイ」という言葉の使用例はほとんどなく、ギリシア人全体を表す総称もまだ確立していない。前 8 世紀のホメロスの叙事詩に描かれたトロイア戦争は、ギリシア連合軍とバルバロイとの戦いでありながら、それを両者の対立として捉えるような言及は認められないのである。このように、まだバルバロイという他者を対置して自己を定義する意識をもっていなかったギリシアは、オリエントの文化を吸収しつつ発展したのであった。

前 1200 年前後にミュケナイ諸王国が崩壊したのち、いわゆる暗黒時代を経て、前 8 世紀には、ポリスが小アジア沿岸部やエーゲ海島嶼、ギリシア本土東南部などに成立し、これ以降、オリエント世界との交易が活発化する。前 750 ～前 550 年頃は、ギリシア人が地中海一帯に進出して数多くの植民市を創建した植民時代であり、スペイン東岸、フランス南岸、南イタリアとシチリア、そしてエーゲ海北部や黒海沿岸、南方ではアフリカのリビアにまで進出して植民市を建設したギリシア人は、それまでにまして諸民族と密接な交渉をもつようになる。こうした躍動の時代を背景に、ギリシア人は様々な面でオリエントの文化を受容し、それがギリシア世界の発展につながったのである。ギリシア人よりも前に地中海一帯に進出し、交易を行っていたフェニキア人がギリシアに与えた影響を強調する W．ブルケルトは、特に前 750 年頃からの百年ほどを「東方化革命」の時代と呼んでいる[2)]。

ギリシア語のアルファベットがフェニキア文字に起源をもつことは有

名だが、建築の様式や彫刻、冶金、貴金属加工の技術についても、ギリシアはオリエント世界から多くを学んだ。例えばギリシアでは前 8 世紀から神殿の建立が始まるが、近東から神殿建築や神像、祭壇を、エジプトからは大規模な建造物の技術を導入している[3)]。また文学においてもオリエントの影響が認められ、M.L.ウェストは、ギリシア文学は近東文学の一種であるとまで主張している[4)]。このように、ギリシア人の精神面にもオリエントは影響を与えたのである。哲学の祖とされるタレス（前 624 年頃～前 546 年頃）は、小アジア沿岸にギリシア人が建設していたイオニア植民市ミレトスの出身で、「万物の根源は水である」と述べたことで知られるが、この発想は、エジプトやメソポタミアに伝えられた「水の神」に示唆を受けたものであるという指摘もなされている[5)]。当時、リュディア王国など西アジア文化圏の影響下にあった小アジア沿岸部において、タレスをはじめとした哲学者たちがその思想を開花、発展させたことは、示唆的である。背景として、オリエントとの文化的接触を無視することはできないであろう。ギリシア本土の貴族層も、リュディアの洗練された文化と豊かな富に、強く関心と憧れを抱いていたのである[6)]。

ギリシアのオリエントへの意識は、「ヨーロッパ」という名称の由来にも象徴されているといえる。よく知られているように、ヨーロッパという呼び名はギリシア神話に登場するフェニキアの王女エウロペに由来する。エウロペは浜辺で戯れているところをゼウスに見初められ、白い牡牛に姿を変えたゼウスによって誘拐されてクレタ島に運ばれて、そこで後にクレタ王となるミノスら三人の子供を生んだ。この王女の名が、どのような経緯によって、ギリシア人の間で自分たちの住む地の呼称となったのかは定かではないのだが、ヨーロッパという名称には、このようにオリエントを意識した自らの位置づけが象徴されているのである。オリエントへの意識は、他の様々な伝説にも反映されている。次に、そこに窺い知ることのできる、アルカイック期ギリシアの世界観を見ていくことにしたい。

2）アルカイック期における世界観

ギリシア人は自らの先史を、当代人よりあらゆる面で優れた「英雄」たちの時代と捉えていた。各ポリスにおいて共同体の祖先・象徴として

崇拝されていた英雄たちは、その共同体のアイデンティティと密接な関連をもっていたわけだが、こうした英雄たちは、伝説上、ギリシアとバルバロイの区別なく、諸民族と関連をもっているのである。例えば、ペロポネソス半島東部アルゴリス地方のポリスであるアルゴスは、ダナオスとその娘たちの物語において、エジプトとのつながりを有している。エジプト王である父よりリビアを与えられたダナオスは、その後、兄弟であるアイギュプトス（この名はギリシア語でエジプトを意味し、すなわちエジプトの名祖である）と争って敗れ、娘たちを引き連れてアルゴスへと逃れて、そこで王位に就いたとされる（アイスキュロス『救いを求める女たち』）。体系的にこの物語を伝えるのは古典期以降の史料だが、すでにホメロスの叙事詩中では、ギリシア軍の呼称のひとつに「ダナオイ（ダナオスの子孫）」という呼び名があるため、この伝説はアルカイック期にすでに成立し、広く流布していたと思われる。

また、小アジアのフリュギア（あるいはリュディア）の王タンタロスの子ペロプスは、ペロポネソス半島へとやってきて王となり、ペロポネソスの名は彼に由来するとされている（ヘロドトス『歴史』7巻11章）。そして、ギリシア中部ボイオティア地方のテバイの建国もまた、東方人の到来によって説明されている。エウロペの兄でもあるフェニキアの王子カドモスは、消えた妹を探してギリシアへとやってきて、神託によってテバイを建設したとされるのである（同5巻57～59章）。

冒頭にふれたバーナルが、ギリシア文明のエジプト・フェニキア起源を主張する根拠のひとつには、実はこうした伝説がある。しかしながら、こうした伝説を、歴史的事実を反映するものとして単純に解釈するのは強引過ぎるであろう。ダナオス伝説の原型には、エジプトからの文化的影響の記憶があるのかもしれないが、それは「ギリシアはエジプトの植民地である」などという意味ではなく、ギリシアが様々な文化要素を内に取り込む過程が伝説に反映されているという捉え方をすべきであろう。伝説の究極的な起源は確かめようがないが、そうした伝説が広まり、受容されえた背景には、先にふれたようなアルカイック期の時代状況があったと考えられる。つまりそこには、植民時代におけるギリシアの開かれた意識が見て取れるのであり、外延に広がる新しい世界を、自身の世界認識のなかに位置づけようという試みが反映されているといえよう[7)]。

もちろんアルカイック期にも、言語などに基づく民族の違いの認識は

あっただろう。ホメロスではまだギリシア人全体を指す名称すら確認できないが、前 7 世紀中頃、アルキロコスの詩の断片では「パンヘレネス（全ギリシア人）」という呼称が認められるように（fr.102*IEG*）、植民時代における諸民族との接触からギリシア人の同胞意識も育まれつつあったことが示唆される。しかし、アルカイック期にはバルバロイという言葉がほとんど確認できないこと、ダナオスやカドモスなどの伝説からしても、それは明確な境界をもたない漠然としたものであったと思われる。少なくとも、その伝説に見るギリシアの世界認識には、異民族に対する蔑視観はない。むしろ、他者を自己に関連づけ、内に取り込むような、アルカイック期の文化混淆を反映した世界観のあり方が見て取れるのである。

だが、そうした世界観は古典期において大きな転換を迎える。次にその転換、すなわち、ギリシア人と対置されるバルバロイのイメージ形成を見ていくこととする。

２．古典期アテナイの言説

１）バルバロイ観の形成と理想的ギリシア人

否定的イメージをもつバルバロイ像が生み出される契機は、前 499 ～前 479 年のペルシア戦争にあったと理解されている。前 6 世紀半ばまでに小アジアを統一したペルシアは、続いてエジプトをも支配下におさめ、オリエントの大帝国となっていた。このペルシアの侵攻というギリシア世界の未曾有の危機に際しての、諸ポリスの団結と勝利とが、民族としての一体感を強めて、ペルシアのみならず全ての異民族を自己に対置し、否定的バルバロイ像を生み出すことにつながったと理解されているのである。

ペルシア戦争勝利に中心的役割を果たしたアテナイでは、多くの市民を前に上演される悲劇において、バルバロイの否定的イメージが表象されるようになっていく。E.ホールが詳細に分析しているように[8)]、それは、自由―隷属、文明―野蛮、民主政―専制君主政、勇敢―臆病、理性―感情、男性的―女性的といった、「優れたギリシア人」と「劣ったバルバロイ」とを対置したステレオタイプである。前 472 年に上演されたアイスキュロスの『ペルシアの人々』では、ペルシア人の非ギリシア的

な性格や行動様式、すなわち、ギリシア人に恐れおののく臆病なペルシア人、ギリシア人の策略にのる脆弱なペルシア人が描かれている。前5世紀末のエウリピデス『アウリスのイフィゲネイア』では、「ギリシア人がバルバロイを支配するのは当然ですが、バルバロイがギリシアを支配することはなりません。むこうは奴隷、こちらは自由人なのです」（1400～1401行）という一節があり、ここには、バルバロイ蔑視の観念が端的に表されているといえよう。またアリストテレスは『政治学』において「バルバロイはギリシア人に比べ、アジア人はヨーロッパ人に比べ、その性格が生来いっそう奴隷的である」（1285a20）と述べ、人間の魂が自分の肉体を支配するのが当然であるように、自由な市民がより劣った奴隷の主人となるのは、自然の道理であると説いたのであった。

しかし、実はアテナイ人は、ギリシアの他のポリスをもバルバロイ的であると見なしていた。例えば、ダナオス伝説を題材としたアイスキュロスの悲劇『救いを求める女たち』（前468年以降上演）では、ダナオスとその娘たちはエジプト人として描写されている。その子孫であるアルゴス人は、アテナイ人にとってバルバロイ的要素をもつ人々だったのである。一方でアテナイ人は、自分たちは大地から生まれ、原初より同一の土地に住み続けているというアウトクトネス神話を喧伝していた。前423年頃に上演されたエウリピデスの悲劇『エレクテウス』では、以下のようにアテナイ人の言葉が述べられている。

> 「アテナイにまさる他のポリスを得られましょうか。アテナイの住民は、どこか他所から移ってきたのではなく、最初から、土地生え抜きの（アウトクトネス）民として生まれたのです。けれど他の諸ポリスは、将棋の駒に似て、あちらこちらへと動かされて建設されたのであり、他所から移って別のポリスになっているのです。」（エウリピデス断片360番6～10行）

もともとこの神話は、太古のアテナイ王ケクロプスとエレクテウスが大地から生まれたとされる伝説が、アテナイ市民全体に投影されたもので、その王の誕生場面が壺絵のモチーフとして象徴的に描かれていた。そうした壺絵が前5世紀前半から増加することから、アウトクトネス神話はこのころすでにアテナイ市民の間に広まっていたらしい[9)]。ギリシア人とバルバロイをめぐって、この神話は重要な意味をもっている。ア

テナイでは、ペルシア戦争以降、戦没者国葬の際に多くの市民を前にして葬送演説が行われるのが慣わしとなっていたが、以下に挙げるのは、その葬送演説を題材にプラトンが著した、『メネクセノス』におけるアテナイ人の主張である。

「アテナイの高貴で自由な性格は、それほどまでにゆるぎなく、健全であり、生来のバルバロイ嫌いなのだが、それは我々が純粋なギリシア人であって、バルバロイの血が混じっていないからである。というのも、我々とともに暮らす人々のうちには、ペロプスやカドモス、アイギュプトスやダナオスの子孫たちはいないし、またその他多くの、生まれはバルバロイだが法によってギリシア人である人々もいないからである。我々はまぎれもないギリシア人で、バルバロイの血がまじっていないことから、他の民族に対する純粋な嫌悪が、生来我々の国に溶け込んでいるのである。」（『メネクセノス』245C-D）

このように、アテナイ人が優れていることの根拠として、アテナイがバルバロイとのつながりを全くもっていないということが強調されている。すなわちアテナイ人は、アルゴスなどの伝説と自らのアウトクトネスとを対比させ、理想的ギリシア人（アテナイ人）―バルバロイ的ギリシア人―バルバロイ、という図式によって自己を理解していた。アルカイック期までの漠然としたギリシア人意識は、バルバロイ的ギリシア人の範疇に位置づけられ、理想的ギリシア人とはアテナイ人自らが生み出したイメージである。

ヘロドトスは『歴史』冒頭で、アルゴスはかつてギリシアにおいて最も繁栄した国であったと伝えているが、ダナオスの伝説以外にも、例えば「テバイ攻めの七将」など、アルゴスについては非常に豊富な英雄伝説が語り継がれていた。アテナイには本来、有名な伝説があまりなかったのに対して、古典期以降もダナオスを崇拝していたアルゴス人としては、エジプトにまで至る祖先の系譜の広がりに、むしろ誇りを抱いていたのではないかと思われるが、アテナイはバルバロイ観と関連づけてそれを否定的評価に転化させ、自分たちこそ純粋な、そして理想的なギリシア人であると主張したのである。

2）ギリシア文化のイメージ

こうしたアテナイ人の主張は、さらに、アテナイこそがギリシア文化を体現するという考えにつながるものであった。例えばトゥキュディデスが伝えるペリクレスの葬送演説では、「我々のポリス全体がギリシアの教育機関である」（第 2 巻 41 章 1 ～ 2 節）と述べられている。そうしたアテナイ人の考えは、前 4 世紀の弁論家イソクラテスの言葉にも明確に見て取れる。

「諸君（アテナイ人）が他国の人々に抜きん出て、優越しているのは、軍事的役目によってではなく、またより優れた政治を行っているからでも、父祖伝来の法をよりよく守っているからでもなく、人間の本性が他の動物に優り、ギリシア人がバルバロイに優るもの、つまり思慮と言論に関して、他より優れて教育されているからである。」（『アンティドシス』293 ～ 294 節）

「…人間のもとにあるよきもののうち、神々から賜ったものは別として、人間によるものついて、我が国が関与していないものはないし、またその大部分は我が国から生じたのである。」（『民族祭典演説』38 節）

「我々の国家は思慮と言論において他の人々を凌駕しているので、我々の国に学んだ者は他の人々に対して教師となっている。そしてギリシア人の名はもはや生まれの名ではなく、精神の名と思われるようになり、共通の生まれによるよりも、むしろ我々の教養を分かちもつ人々が、ギリシア人と呼ばれるようになっているのである。」（『民族祭典演説』50 節）

この『民族祭典演説』の趣旨は、アテナイ人こそがギリシア人の指導権を握るべきであるということにあるから、その含意はすなわち「ギリシア文化とはアテナイ文化である」ということである[10)]。ここには、自らを理想的ギリシア人とするアテナイ人の意識が顕然と表明されているといえよう。

ペルシア戦争勝利に貢献したアテナイは、デロス同盟を結成してエーゲ海の覇権を確立するなど、最も有力なポリスに発展していく。そのアテナイにおいて蔑視すべきバルバロイ観が喧伝され、さらにアウトクトネス神話によって、バルバロイとの関連はイメージ上排除されていった。

そして、純粋なギリシア人であるアテナイ人がギリシア文化を体現し、さらにそれは全ギリシアが共有するものであるという、ギリシア文化のイメージが生み出されることになったのである。

もちろん、言説と実態が違うのは当然であって、古典期のアテナイにおいても、ペルシア風の装飾品、建築様式など、ペルシア文化に対する関心は強かった[11]。またヘロドトスは、その出身地、小アジアのハリカルナッソスがバルバロイの要素が強いポリスであり、一説には彼自身バルバロイの血をひくとも言われているが、そのためか、バルバロイに対する思い入れが感じられる。エジプト人に対しても、人類文化の最古の創造者として敬意を払っており、神の名や宗教儀式、学問など多くの面で、ギリシアはエジプト文化を導入したのだと述べている（『歴史』第2巻43、49～51、58、109、123章）。ただし、P.カートリッジの指摘によれば、このエジプト誌にも、二項対立で描かれたギリシア世界と逆さまの像が投影されているのであって、アテナイ社会に生きたヘロドトスは、やはりバルバロイについての否定的ステレオタイプの他者像を共有していたとされるのだが[12]。

こうした異文化への関心、異文化受容の認識は存在したにせよ、今見てきたような「ギリシア文化」のイメージがいったん生まれれば、また違った形でギリシアとバルバロイとの区分を強調することが可能であった。すなわち、プラトンの『エピノミス』における、「ギリシア人は、バルバロイから何を取り入れた場合にも、結局は、それをより見事なものにつくり上げてきているのだ」（987E）というアテナイ人の言葉のように、進歩の観点からギリシア文化の優位性を主張することもできたのである。

アテナイのイデオロギーを色濃く反映しているバルバロイ観を、ギリシア全体が共有していたという前提に立つことはできないのであるが[13]、アテナイの発展に伴って、アテナイに史料が集中することもあり、こうした言説、つまりアテナイを中心としたバルバロイ観、理想的ギリシア人、アテナイ人が体現するギリシア文化、といった言説は、オリエントを対置するヨーロッパの自己理解の源流として、後世に影響を及ぼすこととなるのである。以下では、近代ヨーロッパによるギリシア像形成にふれつつ、そうした影響に目を向けてみたい。

３．古代と近代の言説

１）ヨーロッパが求めた古代ギリシア

中世以降、ギリシア文化はビザンツ帝国とイスラムに受け継がれたのであったが、その後ヨーロッパが古代ギリシアを「再発見」し、ルネサンスを迎えるという経緯は周知のことであろう[14]。ただし、このように復活したギリシア文化への関心は、直線的に高まっていったわけではなく、古代ギリシアへの関心が広く一般知識人の間にまで普及し始めるのは、18 世紀後半になってからのことである[15]。その新たな潮流を生み出すのに貢献した代表的人物として、ドイツの美術史家ヴィンケルマンが挙げられる。『ギリシア美術模倣論』（1755 年）を著したヴィンケルマンは、ギリシア美術に普遍的な美を認めて、その美の原則を再現しようとした。いわゆる「新古典主義」と呼ばれるようになる立場である[16]。この新古典主義は、芸術界の運動に留まらず、政治上のギリシア再建運動と結びつき、近代ギリシア王国の形成に寄与することとなる。またそうした時勢を背景に、ヨーロッパ各国では古代ギリシアの文学や歴史の研究・教育が着実に進められていったのである。

近代ギリシア王国の成立後、大規模な本格的発掘が可能となったこともあり、ドイツやイギリス、フランスから多くの学者たちが実際にギリシアへと赴いて研究をするようになるが、そうしたなかで、ヨーロッパによる古代ギリシアの「客体化」ともいうべき傾向が進んでいく。象徴的な例として、ギリシア神殿の彩色をめぐる問題がある[17]。近代のヨーロッパ人が親しく眺めてきたギリシアの神殿や彫刻は、風雨に洗われて大理石や石灰岩の素肌を見せているものばかりであった。そのため、そのような清楚さこそがギリシア美術の本質だと考えられていたのだが、19 世紀半ば、実は古代のギリシア神殿は原色で派手に着色されていたことが判明する。専門家の間では彩色が通説となったにも関わらず、今でもその清楚さのイメージの方が強く残っているのは、近代ヨーロッパ人のギリシア美術観と合致するイメージの方が重視されたからである。特にドイツではロマン主義的心情から廃墟を愛する気風が強かったことが影響して、遺跡を発掘しても、古代の状態に復元することなく、廃墟のままに放置することがギリシア考古学では支配的となった[18]。アテネのアクロポリスに聳えるパルテノン神殿の美しさが、古代ギリシア人の

造ったそれとはまた別の、当時のヨーロッパによって望まれた美しさであるということは、象徴的であろう。それはすなわち、ヨーロッパによる古代ギリシアの客体化を象徴しているのである。そして、ギリシアの理想化、ヨーロッパの起源としての古代ギリシア像形成は、政治、哲学など、様々な面に及んでいく。

19 世紀のイギリスでは、ギリシアの芸術だけでなく、政治や歴史に強い関心が払われていた[19]。代表的なギリシア史家として、政治家でもあったジョージ・グロートが挙げられる。グロートは、その大著『ギリシア史』（1846 ～ 56 年）において、アテナイに民主政の起源、自由の原則、合理的な探究心を見出し、アテナイ民主政を理想化した。このグロートの著作は、イギリスのみならずヨーロッパ各国に影響を与え、以後ギリシア史研究のスタンダードとなっていく[20]。古典期アテナイを中心として理想化されたギリシア像の定着は、間接的に、オリエントと隔てられた古代ギリシア史像とも関わってくる。なぜならそうした理想化が、あたかも文化的孤立状態から古典期ギリシア文化が生まれたかのような幻想を生み出しえたからである。

近代は合理主義と科学が興隆した時代であったわけだが、それもまた、古代ギリシアに遡るとされる。こうした認識は、すでに 18 世紀のフランス啓蒙思想に存在していた。テュルゴに始まる進歩史観を欧米に流行させたのはコンドルセであったが、彼の進歩史観において重要であったのは、人間の理性的・科学的覚醒であった。その著『人間精神の進歩に関する歴史的展望の素描』（1793 ～ 94 年）では、古代ギリシアが重要な画期として捉えられていたのである[21]。そしてこのような認識は受け継がれ、イギリスの哲学史家バーネットは『初期ギリシア哲学』（1892 年）において、「ミュートス（神話）」から「ロゴス（理性）」へ、という図式によってギリシア哲学の誕生を理解した。ヨーロッパの歴史を科学的精神の進歩の歴史と捉えるバーネットは、科学の起源を古代ギリシアのミレトス哲学に位置づけたのである。ここでギリシアの前段階として対比されるのは、オリエントである[22]ことに留意しておかねばならない。このような図式化は見直されており、科学的精神についていえば、その起源をメソポタミアにまで遡らせる、フランスのアッシリア学者ジャン・ボテロのような見解もあるが[23]、こうした「理性」をめぐる問題にも、ヨーロッパとオリエントという二項対立が色濃く影を落としてき

たといえるだろう。

そこで最後に、古代ギリシアの「他者」の言説が及ぼした影響について、さらに考察を加えることとする。

2）受け継がれた「他者」の言説

少し時代を遡るが、先にふれたアリストテレスの「先天的奴隷説」は、1510 年、パリ滞在のスコットランドの神学者ジョン・メイジャーによってアメリカ原住民に適用された。その論拠はスペインでも取り上げられることとなり、アリストテレスの訳者としても有名であった法学者セプルベダのような人々が、この説を主張したのである[24]。このように、ギリシアにおける「他者」の言説は、ルネサンスとともにヨーロッパの自己理解の底流に流れ始めていた。例えばモンテスキューが『法の精神』（1748 年）において、「弱いアジア」と「強いヨーロッパ」、「アジアの隷従」と「ヨーロッパの自由」を対比させ、その原因は風土の違いによるとしているのは、ヘロドトスやアリストテレスのバルバロイについての記述を連想させる[25]。

ギリシア古典の研究や教育が最高潮に達する 19 世紀に目を向けるなら、まず想起されるのは、ヘーゲルの『歴史哲学講義』（1822 ～ 31 年）であろう。よく知られる通り、ヘーゲルは、自由の意識の発展に基づいて、世界史は東から西へ、オリエントからギリシア・ローマ、ヨーロッパへ、という歴史像を生み出し、近代的歴史像の形成に最も大きな役割を果たした。すなわち、東洋は専制君主一者だけが自由だが、ギリシア及びローマは特定の人々（すなわち市民）が自由であり、ゲルマンの世界では全ての人間が自由であるという説明である（序論 B）。

自由論の擁護者であったイギリスの哲学者 J.S.ミルにも、ペルシア帝国とギリシアとの対比が見られるが、彼はまた、ギリシアとイギリスのアナロジーを述べている点が興味深い。すなわちミルは「ギリシア人たちの増援をえたマケドニア人たちがアジアを征服し、またイギリス人がインドを征服したように、もしも、より進歩の点で進んでいると考えられている数の少ない民族が、数の多い民族を征服できるならば、文明にとっては、しばしば利益となる」[26] と主張していた。ギリシアの言説が、いかにこの時代のイギリス、ヨーロッパに影響を及ぼしていたかは、評論誌 *Blackwood's Edinburgh Magazine* に掲載された論考の一節から

もうかがい知ることができよう。それは、「我々は、ヨーロッパ文明の優越をあまりに意識しているので、ギリシア人と同じように、全ての非ヨーロッパ諸国をまとめて軽蔑し、野蛮人と見なしがちだ」というものである。この論者はこうした見方を批判しているわけだが[27]、逆にいえばそれは、こうしたアナロジーが広まっていたことを示している[28]。ヘーゲルや、こうした言及に見られるように、オリエントや野蛮人との対比においてヨーロッパを理解しようという大きな流れの底流として、古典期アテナイの言説が受け継がれていたのである。

より直接的に、古代の言説の影響を受けてオリエントを理解した例として挙げられるのは、バハオーフェンの『母権論』（1861 年）である。バハオーフェンは、オリエント的母権制からヨーロッパ的父権制へ、という図式において、ヨーロッパ誕生の画期をギリシアに見た[29]。これはヘーゲルの歴史像とも相通ずる面をもつ。またその図式は、進化論というパラダイムのもとに現れた社会進化論にも影響を与えることとなり[30]、アメリカ人モルガンは『古代社会』（1877）において『母権論』を参照しつつ、社会制度・政治形態・言語・家族・宗教などの観点から、ギリシアに「未開から文明へ」という人類の発展の画期を見た。合理主義・科学の起源がギリシアにおかれたように、古代ギリシアは、近代の進歩史観・社会進化論という思想背景において、ヨーロッパの起点として重要性をもったのだ[31]。

だが、バハオーフェンがオリエント的母権制を見出したのは、バルバロイに対し正反対のイメージ（母権制）を投影したギリシアの史料（アイスキュロス『慈しみの女神たち』やヘロドトスなど）においてであった。ギリシア人は、後進と見なしていた地域・文化に、自己とは違うそのようなイメージを投影していたのであって、ギリシアの諸史料に見られる母権制は実際には存在しなかったのである[32]。すなわちバハオーフェンにおいては、ギリシア人の言説が生み出した「母権から父権」という図式が、「オリエントからヨーロッパ」という発想に移し替えられたのであった。

おわりに

なぜヨーロッパは古代ギリシアを必要としたのか、もちろんそれは一

つや二つの要因によって説明できるわけではないが、進歩の起点として必要とされたこととあいまって、様々な「他者」の言説が古代ギリシアに存在したことが重要な要因の一つであったと考える。西谷修が「断絶や重複や継承の錯綜する複合的構成体であるヨーロッパは、自分が誰であるかを確かめ明示する必要があったのだ」と指摘するように[33]、多様であるからこそ、そのもとに重層的な複合をまとめるアイデンティティの拠り所を必要としたヨーロッパにとって、古代ギリシアは重要だったのである。古代ギリシアも、多様な文化が交差する地中海世界において「複合的構成体」として現れたのだったが、アテナイはそのような「ギリシア」を、バルバロイ観という他者像や、自己を中心に構築した世界観によって巧みに秩序づけていた。バルバロイからの文化的影響を覆い隠し、多様性を収斂させて作りあげられた「理想的ギリシア人」、「純粋なギリシア文化」というイメージは、ヨーロッパによる自己の起源の措定に合致するものだったのだ。このように古代ギリシアには、ヨーロッパが参照すべき「自己」と「他者」の言説が準備されていたのである。

ただし、そこで単にヨーロッパ中心主義をあげつらい、オリエントとギリシアの区分など本当はないのだと主張したり、ギリシアの起源をオリエントに解消してしまうのは、有益ではない。バーナルは極端な批判を行ったのであったが、ギリシア文化の起源を一元的にエジプト・フェニキアへと遡らせるのは、ギリシアのみならずオリエント世界に対しても過度の単純化であろう。そしてまた、ギリシア文化の起源をそのままオリエントに遡ることでヨーロッパを批判しようという論法は、実はギリシア文化に第一の価値を認めている点で、逆説的なヨーロッパ中心主義なのである。

そこでなされねばならないのは、ギリシア内部にこそ目を向けて、ギリシア人とは何か、ギリシア文化とは何か、というところからの問い直しであろう。本報告ではアテナイの言説とヨーロッパの関わりを重視したが、アテナイのイデオロギーを色濃く反映したバルバロイ観やギリシア文化のイメージが、ギリシア全体に共有されていたと考えることはできない。サイードの『オリエンタリズム』に触発されて、バルバロイ観の表象が詳細に検討されてきたことは大きな成果だったが、それに追随するあまり、二項対立的な図式にとらわれ、またそれを再生産している面がある[34]。よって、ギリシア像再考を端緒に、広

く地中海世界全体を視野に入れた歴史像を描くことが必要である。それは、非ヨーロッパ人が、ヨーロッパ人とは違った角度から描くことのできる歴史像となるかもしれない。そして、古代と近現代の言説が相互に及ぼす影響を、より詳細に検討し、それによってヨーロッパ・アイデンティティのありようをもっと深く探っていくことも必要である。そのような考察は、歴史叙述のあり方についても考えをめぐらす、よい機会となるだろう。

注

1）M. Bernal, *Black Athena: the Afroasiatic Roots of Classical Civilization Vol. I: The Fabrication of Ancient Greece 1785-1985*, London, 1987. その論争をめぐっては M. R. Lefkowitz and G. M. Roggers（eds.）, *Black Athena Revisited*, North Carolina, 1996; M. Lefkowitz, *Not Out of Africa*, New York, 1996. 反批判として M. Bernal（ed. by D. C. Moore）, *Black Athena Writes Back: Martin Bernal Responds to His Critics*, Durham and London, 2001 がある。

2）W. Burkert（trans. by M. E. Pinder and W. Burkert）, *Orientalizing Revolution: Near Eastern Influence on Greek Culture in the Early Archaic Age*, Cambridge, MA, 1992. Cf. S. P. Morris, *Daidalos and the Oringins of Greek Art*, Princeton, pp.101-149.

3）J. Hurwit, *The Art and Culture of Early Greece, 1100-480 B.C.*, Ithaca, N.Y., 1985.

4）M. L. West, *The East Face of Helicon: West Asiatic Elements in Greek Poetry and Myth*, Oxford, 1997.

5）G. S. Kirk, J. E. Raven and M. Schofield, *The Presocratic Philosophers*（2nd ed.）, 1983, pp.92-93.

6）L. Kurke, “The Politics of habrosyne in Archaic Greece”, *ClAnt* 11, pp.91-120, 1992.

7）拙稿「古代ギリシア周辺世界における英雄伝説の受容」『史林』85-2、1～32 頁。

8）E. Hall, *Inventing the Barbarian*, Oxford, 1989.

9）H. A. Shapiro, “Autochthony and the Visual Arts in Fifth-Century Athens” in: D. Boedeker and K. A. Raaflaub（eds.）, *Democracy, Empire, and the Arts in Fifth-Century Athens*, Cambridge, MA, 1998, pp.127-151. この神話が広まった背景としては、まず、アテナイの民主政理念が指摘できる。すなわち、皆が大地から生まれたのだとして、市民の平等性と民主政参加の権利を強調するという意味を有していたわけであ

る。また、アテナイ社会に数多く存在した在留外人や奴隷などの非市民に対して、市民団の一体性を強化し、愛国心を鼓舞するという意味もあったと思われる。そうした背景については V. Rosivach, “Autochthony and the Athenians”, *CQ* 37, pp.294-306.

10）村川堅太郎『古代史論集』II、岩波書店、1987 年、第 3 章。

11）M. C. Miller, *Athens and Persia in the Fifth Century: A Study in Cultural Receptivity*, Cambridge, 1997.

12）ポール・カートリッジ（橋場弦訳）『古代ギリシア人―自己と他者の肖像』白水社、2001 年、第 3 章。

13）平田隆一「古典古代における「ヨーロッパ」概念―他者意識と自己認識に関する覚書」『ヨーロッパ文化史研究』2 号、2001 年、1 ～ 56 頁、特に 17 ～ 19 頁参照。

14）Cf. L. A. Ruprechy, Jr, “Why the Greeks?” in: J. P. Arnason and P. Murphy（eds.）, *Agon, Logos, Polis: The Greek Achievement and its Aftermath*, Stuttgart, 2001, pp.29-55. また樺山紘一は、「古代の復活とは‥地中海古典文明の「ヨーロッパ」による簒奪であった」と指摘している。樺山紘一「意識されたヨーロッパ」井上幸治編『民族の世界史 8 ヨーロッパ文明の原型』山川出版社、1985 年、368 頁。

15）藤縄謙三「近代におけるギリシア文化の復興」藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』南窓社、1993 年、221 ～ 251 頁。

16）H.オナー（白井秀和訳）『新古典主義』中央公論美術出版、1996 年。

17）藤縄、前掲論文、235 ～ 236 頁。

18）ドイツの古典古代研究については、S. Marchand, Down from *Olympus: Archaeology and Phihellenism in Germany*, 1750-1970, Princeton, 1996.

19）R. Jenkyns, *The Victorians and Ancient Greece*, Oxford, 1980; F. M. Turner, *The Greek Heritage in Victorian Britain*, New Heaven and London, 1981; id., “Why the Greeks and not the Romans in Victorian Britain?” in: G. W. Clarke（ed.）, *Rediscovering Hellenism*, Cambridge, pp.61-81.

20）A. Momigliano, “George Grote and the Study of Greek History” in: A. Momigliano, *Studies in Historiography*, New York, 1985, pp.56-74; J. T. Roberts, *Athens on Trial, Princeton*, 1994, p.12.

21）市井三郎『歴史の進歩とはなにか』岩波新書、1971 年、第 2 章～第 3 章。

22）H.フランクフォート他（山室静・田中明訳）『哲学以前―古代オリエントの神話と思想』社会思想社、1971 年、第 8 章参照。

23）J.ボテロ（松島英子訳）『メソポタミア―文字・理性・神々』法政大学出版局、1998 年、第 3 部。

24）L.ハンケ（佐々木昭夫訳）『アリストテレスとアメリカ・インディアン』

岩波新書、1974 年。

25）野田良之他訳『法の精神』（中巻）岩波書店、1987 年、第 17 編第 2 ～ 3 章。 Cf. Hdt.2.35; Arist.*Pol*.1327b; Hippoc.*Aer*.16; C. Tuplin, “Greek Racism? Observations on the Character and Limits of Greek Ethnic Prejudice” in: G. R. Tsetskhladze（ed.）, *Ancient Greeks West and East*, Leiden, 1999, pp.47-75.

26）J.S.ミル（水田洋・田中浩訳）『代議制統治論』河出書房、1967 年、375 頁。

27）R. H. Patterson, “The Past and Future of China”, *Blackwood's Edinburgh Magazine* 75, 1854, p.57. この論考は中国について論じたもので、結局のところ論者は、ヨーロッパは中国よりも優れており、中国はヨーロッパ文明を受容しなければならないと考えている。

28）イソクラテスの弁論におけるギリシアと、ヨーロッパのアナロジーについては、J. de Romilly, “Isocrates and Europe”, *G&R* 39-1, pp.2-13.

29）上山安敏『神話と科学―ヨーロッパ知識社会 世紀末～ 20 世紀』岩波現代文庫、2001 年、293 ～ 377 頁。

30）川田順三「「善き野蛮人」から「野生の思考」へ」二宮宏之編『民族の世界史 9　深層のヨーロッパ』山川出版社、1990 年、193 ～ 224 頁。

31）ダーウィンの『種の起源』は 1859 年に刊行されたが、本来の進化論はそうした「進歩」を主張したわけではなかった。進化論と人文・社会科学をめぐる問題については、阪上孝「ダーウィニズムと人文・社会科学」阪上孝編『変異するダーウィニズム』京都大学学術出版会、2003 年、3 ～ 43 頁参照。

32）S. Pembroke, “Women in Charge: The Function of Alternatives in early Greek Tradition and the Ancient Idea of Matriarchy”, *Journal of the Warburg and Courtauld Inst*. 30, 1967, pp.1-35; id., “Last of the Matriarchs: A Study in the Inscriptions of Lycia”, *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 8, 1965, pp.212-247.

33）西谷修『世界史の臨界』岩波書店、2000 年、107 頁。

34）ホミ・バーバは、「サイードにおいては常に、植民地権力と言説は植民者によって全面的に所有されているのだと示唆されているが、それは歴史的・理論的な単純化である」とし、サイードの議論の修正を試みている。（H.バーバ（上岡伸雄訳）「差異・差別・植民地主義の言説」『現代思想』20-10、1992 年、61 ～ 79 頁。）ポストコロニアルと古代ギリシアの違いはあれ、歴史的・理論的な単純化、という指摘は、ギリシア人とバルバロイの二項対立の再考につながるものである。

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）